

第51回 旭川荘障害医療福祉セミナー 講師プロフィール

講義3

大塚 晃 氏
上智大学 教授

「意思決定支援と合理的配慮について」

障害者の自己決定の重要性は誰もが認めるところである。しかし、自己決定が困難な障害者に対する支援の枠組みや方法等については必ずしも標準的なものとはなっていない。そのため、現場の取り組みに混乱が見られる。一方、2016年4月より施行されている「障害者差別解消法」は、障害を理由とする差別の禁止と個々の障害者への合理的配慮を求めている。今回は、昨年、国が公表した、「意思決定支援ガイドライン」をもとに、意思決定支援の定義や意義、標準的なプロセス、現場で適用する際の留意点などについて解説したい。これにより、障害者の意思決定の支援が、合理的配慮の一形態であることを伝えたい。



講義4

井上 雅彦 氏
鳥取大学大学院医学系研究科 臨床心理学講座 教授

「知的障害のある方の行動上の課題に対するアセスメントと支援システム」

知的障害のある人の10～15%に何らかの行動上の問題があるといわれている。行動障害に対する有効なアプローチとしては、環境調整や機能分析があげられるがこれらを活用するには定期的な記録方法の確立と行動理論の理解、チームアプローチが必要である。また重篤化の予防や、在宅での支援については家族へのアプローチが重視されるべきである。本セミナーでは、実践を紹介しながらこれらの基本的視点について概説する。

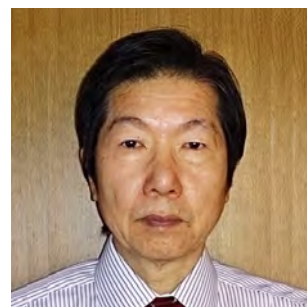


講義5

門 眞一郎 氏
前京都市児童福祉センター 副院長 (児童精神科医)

「合理的配慮としてのコミュニケーション支援」

重度発達障害の人の場合、音声によるコミュニケーションに制約が大きいため、補助代替コミュニケーション (AAC) が欠かせない。どのようなコミュニケーション手段を用いるかは、本人に選択権があり、その選択に応じることは、たいていは合理的配慮の内である。少なくとも支援者は、理解コミュニケーション支援には視覚的構造化等の、表出コミュニケーション支援には絵カード交換式コミュニケーション・システム (以下 PECS) 等の視覚的支援を提供できるように準備しておかねばならない。



LIVE

戸田 雅夫 氏
生活介護事業所 ぬか つくるとこ

「ポエトリーリーディング」

自分が感じた切実な問題、これはちょっと違うぞと言う違和感、自分が感動したことなどをポンやり考えるのが好き。2014年に初めて「とだみくじ」を制作し「とだのみ」を開店。野外マルシェや美術展、ライブ会場などで出店している。2016年自作の詩を読むポエトリーリーディング作品「TODA倶楽部そらみみアワー」を発表。週に2日「生活介護事業所 ぬか つくるとこ」へ通っている。



第 51 回 旭川荘障害医療福祉セミナー シンポジスト プロフィール

「障害がある方の芸術文化活動の魅力と未来」

コーディネーター

川井田 祥子 氏

鳥取大学地域学部教授、NPO 法人都市文化創造機構理事・事務局長

大阪市立大学都市研究プラザ特任講師（2009～2015年度）、同志社大学創造経済研究センター特別研究員（2016年度）を経て現職。誰もが創造的に働き、暮らし、活動する都市をめざす“創造都市論”をベースに、障害者の芸術表現に関する研究とともに、多様な人々のネットワークづくりのために「インクルーシブ・カフェ」を全国各地で展開。NPOの活動では創造都市を目指す自治体やNPO関係者等のプラットフォームを構築し、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の設立に寄与した。

博士（創造都市）。文化経済学会<日本>理事（2012年度～）。

著書は『障害者の芸術表現：共生的なまちづくりにむけて』（水曜社、2013年）、

『障がいのある人の創作活動：実践の現場から』（共著、あいり出版、2016年）、

『創造農村：過疎をクリエイティブに生きる戦略』（共編著、学芸出版社、2014年）

など。

シンポジスト①

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部
企画課自立支援振興室 障害者芸術文化活動支援専門官

大塚 千枝 氏

大学・大学院では文化人類学を専攻。米国の大学等での勤務を経て、2007年より国内の劇場やアートNPOで、舞台芸術に関わる制作業務を行い、行政、企業、教育機関などさまざまな分野と関わりながら、地域の文化芸術活動の実践に取り組んできた。2016年から障害のある人たちの芸術活動に関わる調査や企画に携わり、2017年6月より現職。

シンポジスト②

NPO法人ひゅーるぼん
アートサポートセンターひゅるる

アドバイザー 鱈川 華衣 氏

2002年より、NPO法人ひゅーるぼんスタッフとして勤務する。現場でのアート活動支援を行いながら、法人が主催する芸術作品展の企画運営や、アートを社会に広げる取り組みにも関わる。2017年度よりアートサポートセンタースタッフとなり、広島県内の活動サポートと新たな取り組みである障がいのある人と一般の人でつくる演劇活動のサポートを行っている。

シンポジスト③

ももぞの福祉園

生活支援員 池田 恵里 氏

平成2年生。倉敷市玉島出身。現在8年目。作品展監修蔵知氏からの助言「雰囲気こそそこに用意されることだけで彼らは描き始める。他には何も必要ない。」この言葉をモチーフにももぞのの作品の多くの合作を彼らと一緒に創作している。その創作活動の時間・場が唯一無二の尊い時間に今はなっている。学生時代、美術の評価は2。

シンポジスト④

生活介護事業所 ぬか つくるとこ

スタッフ 丹上 和臣 氏

奈良生まれ。倉敷市在住。木彫りの犬に車輪をつけ散歩をさせながらコミュニケーションをはかる「犬のさんぽプロジェクト」など、自分と他者の“間”を感じさせてくれるものに関心を持ち活動している。2011年からフリーのデザイナーとして活動。通所施設に美術講師として6年間関わり「生活介護事業所 ぬか つくるとこ」（岡山県）の立ち上げメンバー。2013年から同事業所に勤務している。